

「徳商鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』昭和2年5月12日

「徳島毎日新聞社支局長に迎へられて 五月六日（第五日）昨夜は車中泊で非常に冷えた。窓など全部閉めてあるのに二月頃の気温 で三時頃には殆ど皆眼を覚して或者是はシャツ、オーバー等を着、持合せのないものは風呂敷に 荷物を包んで体の上へ置くといふ有様で、昨夜中に風を引いた者数名あった。春時分鮮満地方 へ旅行せられる方は冬シャツを是非携帯せらるる必要がある。七時十六分永登浦着、徳島毎日新聞京城支社長尾関亀繁氏が京城徳島県人会代表にてお迎へにおいでになって居た。八時同駅より仁川へ——上仁川駅で下車、仁川商業学校教諭、本校先輩のお出迎へを受け、同氏達の御案内で仁川府内見学、人口五万余、中内地人約二万、公園が二つある。僕達は仁川公園へ行った。同園は小丘で丘上に天照大神をお祭りしてあるところの仁川神社、一名八坂神社参拝。同所で仁川商業教諭の仁川港の歴史及び大略の御説明あり。毎年二月九日要所要所でかがり火を燃やして敵艦撃沈の日を記念する由、直に下丘仁川港のドック式港見学、實際開 閉して見せて下さった。同港干満の差の甚だしいこと世界第二、約廿七八尺といふ話だ。それから昔勢力を有したといふ支那町を通り月尾島へ行く。同府は東へ東へと発展して行くといふ話だ。同島迄長い長い美しい道路がついて居る。同島の潮場に上って休息。仁川徳島県人会長杉原氏の仁川米穀産出及輸出入状態ならびに其将来に関して有益な御講話あり。そこで山口中学と一緒にになった。すぼんに白線を入れてあって大層八釜敷いやつだ。それから一同塩風呂へ入る。時間が来たので下仁川駅へ行く。仁川県人会から昼弁当を下さって、一同の見送りの内に列車は京城へと——。龍山駅には憲兵少佐赤澤氏がお迎へ下さった。京城駅着、同駅にも県人会員数名のお出迎へあり。京城駅は大きな設備のよく整った美しい駅だ。一同整理して駅前朝鮮神宮参拝に行く。未だ十分道路が改造せられて居なかった。一同参拝後神宮より同神宮に関して御話があった。同神宮は南山にあり天照大神及明治天皇の二神を御奉祀し申し上げた官幣大社で、大正八年起て同十四年十月十四日御霊体を東京から此処へお遷し申し上げ、用材は殆ど全部木曾檜材を御使用になって居るといふお話だ。それから境内で赤澤少佐殿の御説明あり、後ラムネを下さった。広い三方山に囲まれた京都みみたいな町だ。それから下山して山麓の朝鮮物産陳列所を参観、旧総督府の跡だ、あまり目に止まる物も見当らなかった。参観後賑やかな本町通りを通り永楽町二丁目旭旅館へ着いた。尾関氏とここでお別れした。改めて同氏に厚くお礼申し上げます。時に午後五時、山口中学校が又先へ休息して居た。夕食後八時頃から府内見物本町通りを西へ行く。実に賑やかだ。内地人が多く出て居た。それから支那人町へは行った。支那の家は皆赤緑などの毒々しい色を塗ってある。朝鮮郵便局から北に折れ迷い迷って何時か鐘路通りへ出て来た。支那人朝鮮人が小さいテント張りの店を出して居た。内地人などは殆ど見当らない。淋しい気になった。友達といっても二人しかない。一人はしきりに心配して居た。巡査に二回も尋ねた。妙な小さな通りを歩いてやうやく本町通りの東へ出て来て皆は始めて胸を撫で下した。十時には或者是長い煙管を右手に或者是絵葉書をポケットに旅館へ帰った。大そう疲れたのでグッスリと眠った。本日の仁川県人会及京城県人会員尾関、赤澤其他の諸氏のご尽力を感謝しつつ……（京城旭旅館にて）」